

私のルール・わが家の約束事

和歌山県・和歌山県立桐蔭中学校 1年 平井 未来

「お小遣いは、1万円。」

そう言うと、友達のだれもが「えっ？」と驚く。でも、それにはカラクリがある。月1万円、年間12万円で、私は自分に必要な物、^{すべて}全てをまかなわなくてはいけないのだ。

友達と一緒に遊ぶお金、携帯電話代、本代や文房具類だけでなく、服や運動靴、下着もお小遣いでまかなわなくてはならない。

そのことを話すと、

「自分の好みで好きな物を買えていいなあ。」

と言う友達と、

「それじゃ、全く足りない。」

と言う友達に分かれる。

ことの始まりは、小学6年生の時だ。母が、

「お金の使い方を学んだほうがいいと思うのよ。携帯代も含めてお小遣い5,000円あげるから、それで何もかも自分でやってみない？」

といきなり切り出したのだ。私は、

（5,000円もくれるの？ ヤッター！）

と思った。だって、それまでは、お小遣いは500円だったのに。私は、

「うん。やってみる！」

と勢いよく答えた。すると母は、

「それじゃあ、ルールを決めよう。」

と言いだしたのだ。

2人で2日間かけて話し合っ^て決めたルールは、お小遣い帳をつけ1か月ごとにチェックを受ける・お年玉など臨時収入は全て貯金する・教育費は母が支払うが、それ以外は私が支払う・他人のために使うお金はケチらない・リサイクル

ショップやネットショップを利用する際は、必ず母に相談し許可を受けるなど。
ほかに他にも事細かなルールを決めた。

そして、新たなお小遣い制の開始時に、

「計画的にお金を使えたら、中学生からは月1万円にしてあげる。でも、計画的に使えないようなら、今後お小遣いが他の子より少ない額でも文句は言わせない。」

と、母に宣言されたのだった。

新しいお小遣い制が始まるとすぐに、これは大変なことだと気づいた。先のことを考えると、全く無駄遣いが出来ないのだ。

それからの私は、携帯代金もお小遣いで支払うので、使いすぎないように気をつけるようになった。お金を使うことに、慎重にならざるを得ない。服や靴を買うのも全部自分で支払うことになったため、先を予測してお金を貯めておかなければならないからだ。今着ている服や履いている靴も、来年は小さくなっているかもしれない。

服を買う時も、可愛いから欲しいとはいかなくなった。まずは予算を立てなくてはならない。値段をみて、あきらめる場合がほとんどだ。しかし、今までは一つの店で服を買ってもらっていたが、それでは予算オーバーになるので、いくつもの店を見てまわり、好みの服を探す楽しみが生まれた。予算の範囲で、好みの服を見つけた時はとても嬉しいし、その服はお気に入りとなって大切に着るようになった。

また、自分にとって本当に必要なものかどうか、買う前に何度も考えるようになった。そして、必要ないと思うものはあきらめて買わないようにすると、不思議なことに、少し日がたつと、「全く必要なし」という気持ちになっているのだ。

母は、今のお小遣い制になってからは、全く援助してくれなくなり、友達とではなく母と一緒に映画を観る時も、自分の分のチケット代はお小遣いから支払う。ジュースを飲みたい時は、母に「半分コしよう」と持ちかけて割り勘にしてもらうなど、支払い方も工夫するようになった。

また、母とは身長が同じくらいなので、着られる服は借りて済ませ、被服代金を浮かせるようにしている。節約できるものは、節約するのだ。

どうして、こんなお小遣い制にしたのかを母に聞いてみると、「大人になって

欲しい物が我慢できず、使いすぎて支払えなくなり自己破産するようになっては困る」と感じたからだそうだ。

母は、「計画的にお金を使うということは自分の収入に合った生活をする。欲しい物が必要かどうか取捨選択し、我慢できること」だと言う。

今のお小遣い制になってから、私は物の価値についてとても考えるようになった。同じ1,000円でも、その物が自分にとって価値のある物なら安いと感じるし、価値がなければ高いと感じるようになった。

このお小遣い制度は、わが家のルールだ。この中で学んだことは、値段だけにとらわれずに、本当に自分に必要か、価値があるかを考え、みきわめてからお金を使うということだ。これが、お金に対する「私のルール」なのである。

